

永安州時代の太平天国をめぐる一考察

菊池 秀明

はじめに

近年の中国史研究における変化は、新史料の発掘による歴史像の再構築という動きであろう。なかでも清朝政府の公文書であった檔案史料の公開は、従来編纂された史料集や地方志レベルでしかわからなかった歴史の具体像を我々に開示することになった。また中国近代史研究における新史料の発見は、それぞれの時代の政治的要請に基づく一面的な歴史認識の見直しを可能にした。かつて中国革命の先駆者として称えられ、現在はその破壊的側面が強調されることの多い太平天国運動（1850-64年）も例外ではなく、今こそ客観的な立場からこの運動の実像を解明する必要性が高まっている。

さて太平天国史研究において難しいのは、残された史料が少ない広西時代の歴史である。かつて筆者は広西東南部におけるフィールドワークの成果に基づき、移民社会のリーダーシップを握った科挙エリートと非エリート間の対立が、この運動を生んだ基本原因であったことを明らかにした¹⁾。また別著では19世紀前半における中国南部の社会変容について分析し、清朝の統治が新興勢力を活用する柔軟さや辺境経営への情熱を失って行きづまり、秘密結社への禁圧が進む中で、人々は直接的な行動に訴えることで「理想なき時代」を乗り越える処方箋を熱望していたと述べた²⁾。さらに前二稿では上帝会の偶像破壊運動が社会に大きな衝撃を与え、慎重かつ周到な準備によって金田蜂起が準備されたこと³⁾、江口、武宣、象州を転戦した太平軍は団營に間に合わなかった会員を糾合し、清軍の士気の低さや諸將の不和に助けられて金田一帯の包圍網を脱出したことを指摘した⁴⁾。

本稿は永安州（現在は蒙山県）時代の太平天国について検討する。具体的には太平軍が永安州を占領した1851年9月から、清軍の包圍を突破して桂林へ向かった1852年4月までを扱う。この時期の歴史については簡又文氏、崔之清氏が言及しており⁵⁾、鍾文典氏は長年にわたるフィールドワークの成果を元に本格的な分析を行った⁶⁾。また地元蒙山県の研究者による研究成果が存在することも一つの特徴で、史料集の編纂や遺跡の保存が積極的に行われている⁷⁾。

筆者は1986年および1987年、1996年、2007年に蒙山県を訪問し、簡単なフィールドワークを行った⁸⁾。また中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』が刊行されると⁹⁾、1999年から2008年に台湾故宮博物院を訪問して当該時期の宮中檔案、軍機處檔案を系統的に閲覽、収集した。さらに2008年にはイギリスのNational Archivesを訪問し、両広

総督衙門に残された太平天国史料を閲覧する機会を得た¹⁰⁾。

そこで本稿はこれらの新史料を活用して、永安州時代の太平天国の活動と清朝政府の対応を出来る限り客観的に分析してみたい。長く日本の歴史学界では軍事面を含んだ政治過程の分析は軽視される傾向が強かったが、特定の分野をいつまでも等閑視することは許されない。また地方幹部の腐敗と圧政に対する不満が高まっている中国の現状を見れば、下層民衆による騒擾事件を新たな視点で取りあげ、分析する必要性は急務となっている。つまり本稿の目的は太平天国史を従来の階級闘争史観から解き放つことなのである。

以下では①太平軍の永安州占領とその後の軍事的措置、②太平天国の地域経営と五王制に代表される政治制度の創建、③清軍包圍網の問題点と周錫能の肅清事件、④太平軍の永安州脱出作戦と洪大全問題について分析を進めたい。

1. 太平軍の永安州占領と王朝体制の創建

a) 太平軍の永安州占領とその後の軍事的措置

1851年9月に桂平県新墟を退出し、平南県官村の戦いで広西提督向榮の軍を大敗させた太平軍は、大旺墟から水陸両軍に分かれて永安州へ進撃した。うち蕭朝貴率いる陸路軍は藤県大黎里を經由し、9月23日に永安州南部の水秀（水竇とも呼ぶ）村に進出した。水秀村には平樂協副将阿爾精阿の率いる清軍400名が駐屯していたが、羅大綱の先鋒隊が姿を見せると永安州城へ後退した。翌日羅大綱は州城の東に陣を布き、25日にこれを攻撃して陥落させた¹¹⁾。光緒『永安州志』には「賊は市場の爆竹を全て集め、城の西南隅に山のように積んだ。西南の風が吹いたため、燃やした爆竹の煙が辺りを蔽い、城上は視界が失われて、ついに支えられなくなった。賊は陳姓の門樓から梯子をかけて城壁を登り、ついに城は破られた¹²⁾」とあり、太平軍が奇抜な戦法で清軍の守備隊を混乱に陥れたことがわかる。この戦いで団練を率いていた蘇保徳（生員）、湯慎武（廩生）らが戦死し、知州呉江と阿爾精阿は捕らえられて殺された¹³⁾。

永安州は太平天国が占領した最初の城であった。明代に築かれ、清初に改修された州城の規模は周囲が248丈（約800メートル）、高さは1丈6尺（約5メートル）で、蒙江（湄江）、通文江という二つの川に挟まれていただけで濠はなかった。その後城垣は「崩れて不全」であったが、1844年に知州張輔世が紳士たちの寄付を集めて改修工事を行った¹⁴⁾。今も一部現存している城壁には、「道光」の二文字が刻まれた焼きレンガが用いられている。この「小さな山城」を拠点とした太平天国は、それまで「一夜のうちに三度居所を移す¹⁵⁾」といった流動生活に別れを告げ、新王朝のひな形を摸索することになった。

楊秀清らの率いる水路軍は藤県三江口で覃翰元¹⁶⁾率いる団練などの抵抗に遭い、永安州城に到着したのは10月1日であった。この日洪秀全は「籠に乗って城に入り¹⁷⁾」、知州の衙署に居を構えた。入城にあたって洪秀全は「およそ一切の妖の殺害や城の奪取において、獲得した金宝、絹布、宝物などは私蔵を許さない。ことごとく天朝の聖庫に納めよ¹⁸⁾」と命じ

た。また 1853 年にパリで出版された Callery et Yvan の著書によれば、太平軍は「我々は決して大頭羊（即ち張釗らの天地会軍）のように水上で船を襲ったり、至るところで掠奪を働いたりしない」と述べたうえで、兵士による「無辜」の殺害と掠奪を禁じて、人々に「各々生業に安んじる」¹⁹⁾ ように呼びかけたという。

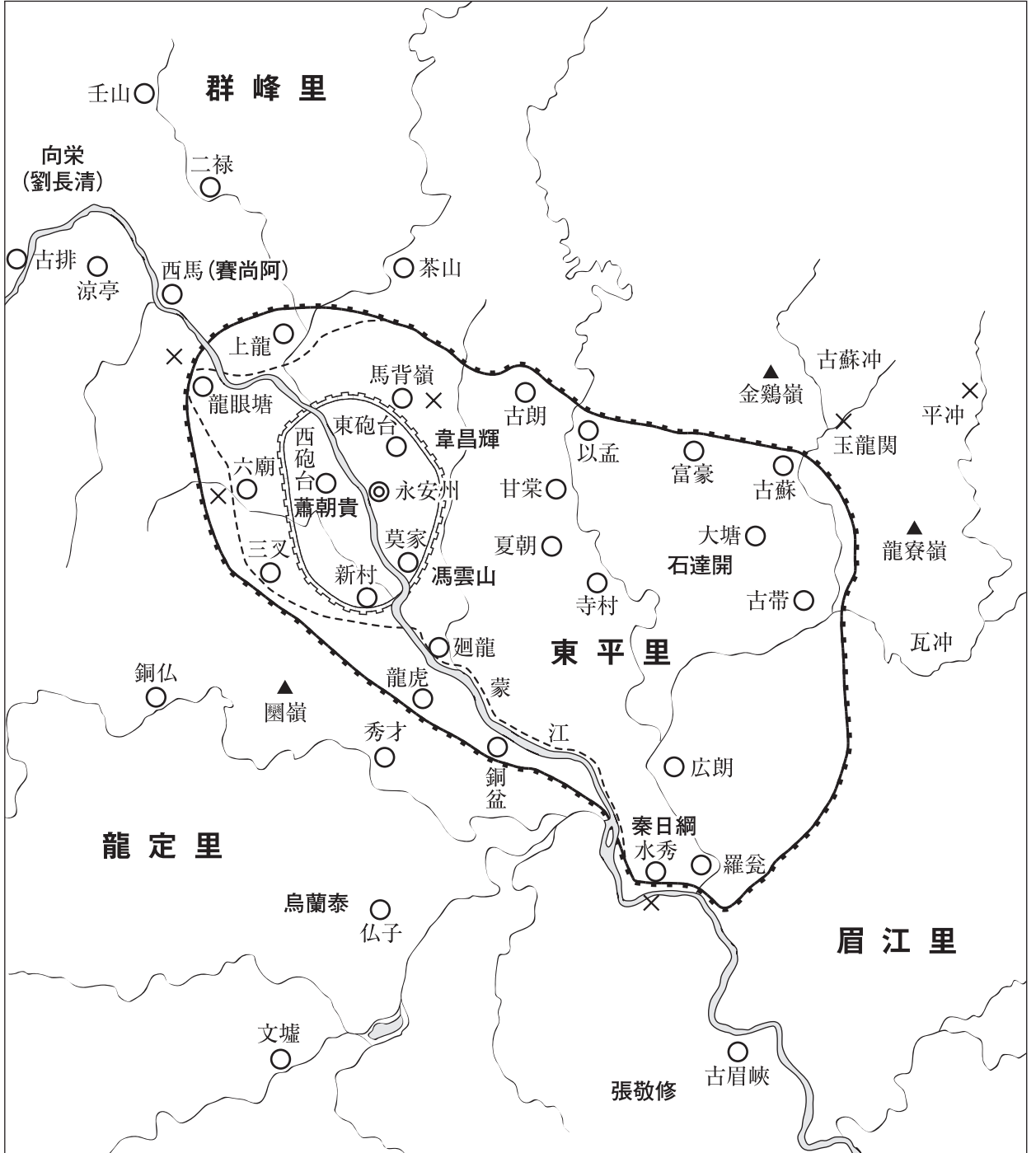
それでは初めて出現した太平天国王朝の風景はどのようなものだったのだろうか。欽差大臣賽尚阿の随員として従軍していた丁守存は、太平軍の退出後に永安州城の様子を克明に記録している。それによると州署の外側には多くの「偽示」が張り出され、将校たちの「風帽」による階級の区別を示したのものや、軍帥の命令などがあった。その内壁には黄色い紙が貼り巡らされ、二朝門、三朝門、四朝門と記した額が掲げられていた。内門も黄色で、一對の竜の絵が描かれていた。さらに広間へ進むと竜、鳳凰が描かれた洪秀全専用の車が置かれており、紗張りの燈籠には黄地に紅字で軍師や王府と書かれていた。また広間の前には植木鉢が置かれ、紅い絨毯が敷かれていたという。小規模ながら威厳のある空間が演出されていたことがわかる。

永安州城の周囲には、清軍の攻撃に備えて防禦体制が整えられた。その中心は東西に設けられた砲台で、瞭望嶺に置かれた東砲台には韋昌輝が、団冠嶺に置かれた西砲台には蕭朝貴がそれぞれ陣取った。丁守存は「西砲台へ行って賊が設けた望楼、砲台、砲眼および一切の竹木土墻と竹簽を見たが、門は方向を変えて作られ、溝の幅も広く、その拠点は実に要害の地で、どこでも敵を防ぐことが出来た」²⁰⁾ とあるように、太平軍が優れた陣地構築を行っていたことを認めている。また州城を中心に東西の砲台、馮雲山が 2,000 名を率いて駐屯した城南の莫家村を囲むように土塁が築かれ、清軍の州城接近を防いだ。さらに戦略的要地だった南部の水秀村には秦日綱が 1,000 名の「精銳」²¹⁾ を率いて守りを固め、東部の大塘には石達開が駐屯して東平里一帯の支配を進めた。

いっぽう清軍の動きであるが、太平軍が永安州を占領した時に広州副都統の烏蘭泰は平南県の馬練にいた。9 月 26 日に永安州西南の文墟に到着した烏蘭泰は、昭通鎮総兵経文岱と楚勇の首領江忠源（湖南新寧県人）が率いる兵 3,000 名と共に州城から 6 キロの仏子村へ向かった。また 27 日に賽尚阿は按察使姚瑩、漳州鎮総兵長寿を兵 200 名と共に永安州の北にある陽朔、荔浦県へ派遣し²²⁾、10 月 3 日に川北鎮総兵劉長清、臨元鎮総兵李能臣の率いる四川、雲南兵 4,200 名も桂平県から永安州西北の古排塘に到着した²³⁾。

これら清朝側の措置は太平軍を永安州に包囲して殲滅しようとするものだった。姚瑩は太平軍が全て永安州に入ったのは「絶好の機会」だと述べたうえで、「賊にとって有利なのは流動戦であり、かつ左右の地に手助けしたり従ったりする者が必要である。一つの城を孤守するのは土地が狭く食糧もなく、援軍も得られないため、賊にとって不利だ。いま大兵が四面から包囲攻撃をすれば……、一撃のもとに成功することが可能だろう」²⁴⁾ とあるように、太平軍の殲滅に楽観的な見通しを述べていた。

9 月 28 日に仏子村に到着した烏蘭泰は、各地の兵が揃うのを待たずに永安州城へ進攻し



永安州地圖 (1851年9月~52年4月)

た。太平軍は園嶺にいた守備隊 8-900 名がまず迎撃し、州城と水秀村から出撃した 2,000 名がこれに続いた。このとき太平軍の防備はまだ充分でなく、水路軍も到着していなかったため、烏蘭泰軍は「撃斃する者実に四、五百人、まことに大勝利だった」²⁵⁾と善戦した。しかし「兵少なく砲なく、包圍攻撃することが出来なかったため、やむなく撤兵して陣地へ戻った」²⁶⁾とあるように、兵力不足のため仏子村に引きあげた。

その後烏蘭泰は太平軍と小競り合いをくり返したが、姚瑩が「賊は屢々文墟へ行き、みな官兵に敗北したが、孤軍であるため深入りすることは出来なかった」²⁷⁾と報告したように、他の清軍部隊との連携を欠いていたために守勢に回った。清軍が初めて本格的な攻勢をかけたのは 10 月 14 日のことで、烏蘭泰配下の鎮遠鎮総兵秦定三が水秀村を、侍衛開隆阿が莫家村を攻めて太平軍を引きつけ、その間に古排村の劉長清、李能臣が一気に永安州城を攻略するという作戦だった。

ところがこの日劉長清、李能臣は共に病気で出撃できず、部下の將校に統率を任せた。はたして清軍は州城西門に迫ったが、「該匪は先に山嶺に砲を置き、柵を設け、関所を立てて攻撃を阻み、大砲が雨のごとく降り注いだ」²⁸⁾とあるように西砲台の守備隊による抵抗にぶつかった。この時委員州牧の王啓秀らが荔浦県で組織した福建勇は前進したが、四川兵、雲南兵が「戦わずして退いた」ため、福建勇も撤退して清軍の攻撃は失敗した²⁹⁾。さらに 10 月 18 日には向榮の派遣した綏靖鎮総兵李伏の軍が、昭平県から永安州東部の古蘇冲口まで進撃したところ、石達開率いる太平軍の奇襲を受けて敗走した³⁰⁾。

これら戦闘の結果を知った姚瑩は、太平軍について「よく兵を用いる者であり、小寇と見なすことは出来ない」³¹⁾と認識を改めた。また永安州の地形を調べた結果、現状では太平軍の方が有利だと分析し、その理由として「第一にわが方は兵が戦いに怯え、将は心が揃っていない。第二に大兵が分かれて駐屯し、劉[長清]、李[能臣]は州城の西北に、烏[蘭泰]は西南におり、向[榮]は東から来るものの、どこに駐屯するのかわからない。もし気脈が通じれば、もとより犄角の勢いとなるのも可能だが、もし齟齬があれば、互いに応じることができない」と指摘した。さらに姚瑩は省都桂林から補給物資を送るルートが確立していないことを挙げ、「これを地元の者に尋ねたところ、餉道はみな賊によって塞がれており、甚だ憂慮すべきである」³²⁾と述べている。

その後清軍は 11 月 2 日と 11 日に南北から攻撃をかけたが、いずれも太平軍に撃退された³³⁾。この時に「賊を見ればすぐ逃げる」と非難されたのは四川兵で、「渡河しようせず、州城から二里ほど離れたところで遥かに関の声あげ、鉄砲を放って勝利報告をするだけ」³⁴⁾と酷評された。いわば清朝は太平軍の永安州進出という情勢の変化に迅速に対応できず、太平天国は相対的に優位な立場で永安州の経営を進めたのである。

b) 太平天国の永安州統治と王朝体制の創建

永安州が置かれたのは 15 世紀のことで、かつては「民は三、獠獍が七」³⁵⁾と言われた少

数民族の居住区であった。龍定里の秀才三石村関氏³⁶⁾、大龍村楊氏³⁷⁾などの漢族有力移民は多くが17世紀に永安州へ入植したが、土着の有力宗族として大きな影響力をもったのが馮雲山の駐屯した莫家村を中心とする莫氏であった。彼らは宋代に河南から移住したといい、永安州城の建設で土地を提供したり、1598年の反乱時にヤオ族を降伏させた功績によって、「子孫代々の夫役を免除」される特権を与えられた。この特権を活かして所有地を拡大した莫氏は、11代莫遜仕が万暦年間拳人となったのを初めとして多くの科挙エリートを生み、清代中期には「蒙山一邑について論じれば、富貴の二字を語る者はみなわが莫氏を第一に挙げる」³⁸⁾と言われたように勢力を拡大した。

永安州で漢族移民が増加したのは清代中期のことだった。何秉氏の調査によると、乾隆年間から道光年間にかけて62戸の移民が東平里へ入植したが、うち38戸が広東広州府、肇慶府、嘉応州から移住した客家であったという³⁹⁾。筆者が収集した史料からも同じ傾向を見ることができ、東平里古鑿村孔氏の始祖孔広球は19世紀初めに広東恩平県から永安州へ移住した⁴⁰⁾。また甘棠村の李春榮一家は嘉慶年間に広東揭陽県から広西昭平県へまず移り、1862年に東平里へ入植した⁴¹⁾。初期の太平天国において客家が多数を占めたことはよく知られているが、東平里一帯に多くの客家が住んでいた事実は、永安州占領後に太平天国が安定的な統治を行ううえで重要な条件となった。

太平軍が永安州に入った当初、まず問題となったのは食糧の確保であった。幸い10月は晩稲の収穫期に当たり、太平軍が占拠した東平里は「土田は肥沃で、農穀は最も優」⁴²⁾と言われたように永安州随一の穀倉地帯だった。このため太平軍は「聞くところでは賊匪は現在毎日のように出ては近くの村莊を搶掠している」⁴³⁾とあるように、稲の強制的な刈り入れを行った。その結果「その糧食は昨年秋に賊がやってきた時に、州民は刈り入れをしていなかったため、州城附近の稲はすべて賊に収穫され、このため充足した」「逆匪の米は昨年閏八月に搶割した後は倉庫に満ち、昨年捕らえた者の供述によると、今年正月、二月（1852年2月、3月）までの食をまかなえるとのことだった」⁴⁴⁾とあるように、当面必要な量を確保することに成功した。

広西で長年にわたる実地調査を行った鍾文典氏は、このとき太平軍が多くの場合小作農だった客家移民と収穫物を折半したと指摘している。氏によれば、太平軍は収穫量の多寡は問わず、田ごとに竹ざおを立てて半分に分け、一方を太平軍将兵が、一方を小作人たちが刈り入れを行った。この方法はシンプルで実行が容易であったばかりか、収穫の半分以上を小作料として納めていた客家移民にとって有利であり、速やかに食糧を確保しながら人々の支持を勝ち取るうえで有効な方法であったという⁴⁵⁾。

蕭朝貴の陸路軍が藤県大黎を通過した時の状況について、李秀成は「村々の食糧や衣服はすぐに取られてしまい、人々が山奥にかくした食糧もやはり取られてしまった」⁴⁶⁾とあるように、食糧を全て奪われたために太平軍に同行せざるを得なかったと回想している。この事実を見る限り、太平軍が農民と収穫を折半したという話にはにわかに信じがたい。だが『天朝

田畝制度』によると、収穫物のうち自家用の消費分は人々の手元に置くことが認められていた⁴⁷⁾。また余った穀物は全て聖庫に納められることになっていたが、水秀村北側の中営嶺に作られた聖庫の跡からは現在も炭化した米が大量に出土しており、太平軍が永安州を脱出するまで食糧は確保されていたことがわかる⁴⁸⁾。さらに後代のことになるが、曾国藩も「粵匪が初め興ったときは、荒削りながらも規則があり……、民に耕作をさせて占拠した県を安んじ、人々が収穫すると、それを民と半分に分けた」⁴⁹⁾と記している。初めての占領地であった永安州で、太平軍が安定的な統治を実現するために収穫物を地元の下層民と分け合った可能性はあると考えられる。

むろん太平軍が収穫物を小作人たちと折半したことは、この地を支配していた有力移民たちに大きな打撃を与え、彼らの反発を生んだ。何秉氏の調査によれば、莫家村莫氏の15代莫讓仁兄弟は乾隆、嘉慶年間に3,000畝の水田を所有し、「最も著名な富翁」だった17代莫若高は「粟を積むこと巨万に至り、田産を置買すること五、六千石」であった。比較的豊かだった東平里では地主による土地所有が進み、米穀の広東搬出を目的とした農業経営が行われていたからである。莫家村の蒙江沿いには埠頭が築かれ、毎年小作料として集められた米70-80万斤が梧州の戎墟に送られたという。

有力移民はこれらの富を独占し、遅れて入植した客家移民と対立していた。1801年に東平里夏朝村に入植した劉貴忠（広東文明県人）の場合、莫家村莫氏は彼らが荒地を開墾することを認めず、他所へ追い払おうとした。すると夏朝村劉氏は營潘村李氏（広東恩平県人）と協力して対抗し、さらに夏朝村の古響嶺に住む張氏と劉氏（共に広東興寧県人）が加勢して械闘の準備を進めた⁵⁰⁾。太平軍が永安州を占領すると、莫家村莫氏の18代莫世熙（增生）は団練を組織して太平軍に抵抗した⁵¹⁾。これと対照的に夏朝村劉氏は3代劉玉球が太平軍に参加し、夏朝村の人々を稲の刈り入れや陣地構築に動員したという⁵²⁾。

次に興味深いのは東平里寺村姚氏の事例である。『姚氏族譜』によると、彼らは広東嘉应州出身の客家で、明末に龍定里秀才村に入植し、康熙年間に寺村へ移住した。彼らは14代の姚体行が道光年間武拳人となり、14代姚体備、15代の姚延年など数名の生員を生んだ。莫家村莫氏と夏朝村、營潘村の客家連合が械闘の準備を進めると、姚氏の人々は客家でありながら「土人」即ち土着勢力の一員として莫氏に味方した。そして太平軍が永安州に入ると、16代の姚受爵（廩生、拳人姚廷珠の父）は団練を組織し、16代の姚明新（庠生）は涓江里大沙村で戦死した⁵³⁾。姚氏の客家か、土着民かというアイデンティティが入植時期や科挙合格者の有無など様々な要因によって変化し、それが太平天国に対する態度にも影響している点が特徴的である。

さらに永安州北部の群峯里西馬村に住む陸氏について見たい。彼らは広東翁源県から移住した客家で、藤県大黎郷古制村に定着した同族からは陸順徳（のちの来王）、陸十三（陸順徳の兄、永安州攻撃の時に戦死）が太平軍に参加した。だが西馬村では「家境は困難」だった十三代陸健文が1851年12月に「賊（太平軍をさすと思われる）に傷害」されて死亡し

た。また太平軍の退出後、何村莫氏（莫家村莫氏の同族）が陸氏の所有する山場を占拠しようと図った。この時彼らは「族勢が弱く、莫姓という巨族には対抗出来ないと恐れて、ついに過程村に住む陸正公の後裔と連絡を取り、宗族団体を結合して外から侮られるのを防いだ」⁵⁴⁾とあるように、同じ永安州内に住む同族と結束して有力宗族に対抗したという。ここから貧しい客家移民がみな太平軍に参加した訳ではないが、彼らは有力宗族の圧力に対抗すべく同族結合を強化する必要に迫られており、そうした選択肢の一つとして太平軍に参加または協力する可能性があったと言えよう。

なお漢族による開発が遅れた山郷の永安州では、有力移民の支配力には限りがあり、彼らが組織した団練も弱体だった。太平軍が永安州を占領すると、陳培桂（州城南門外人）は「都統烏蘭泰の軍に投じ、戦いでは士卒の先頭に立って、頭を負傷しても恐れなかった」⁵⁵⁾と言われた。また平崗堡土舎（茶山土司）の李清華は、土兵を率いて太平軍の密偵を捕らえたが、太平軍の報復攻撃によって家を焼かれたという⁵⁶⁾。だがこれ以外に永安州の団練で目立った抵抗はなく、姚瑩も「示諭永安州土民文」において「どうして永安一ヶ所だけは、州城が破られて文武官員が犠牲になったのに……、いまだ団練で賊を防いだり、これを殺して褒美を求める者が現れないのか」⁵⁷⁾と嘆いたほどだった。

このため永安州の有力移民の中には太平軍にあえて抵抗せず、その要求に従って物資を提供する者も現れた。龍定里秀才村の梁文著（生員）は1844年の永安州城の修築工事で銀數百両を寄付した富豪であったが、太平軍が永安州を占領すると、「独自に数万擔（の米）を寄付して軍需に充てた」⁵⁸⁾という。また東平里広朗村の陸広平は「少し財をなしたばかり」の新興地主で、太平軍に物資の供出を命じられたが、恐怖のあまり夜中に金銭を持って逃亡した。すると太平軍は彼の家に残された財産を没収し、焼きレンガの家を壊して陣地構築に使ってしまった⁵⁹⁾。このように有力移民に目立った抵抗がなかったことは、太平天国が永安州を安定的に支配することを可能としたのである。

さて永安州において太平天国が創った制度の中で、最も有名なのは五王制に代表される世襲的な等級制度であった。1851年12月17日に天王洪秀全は詔を発し、正軍師だった楊秀清（紫荊山茶地では中軍主将）を東の国々を支配する東王に、蕭朝貴（同じく前軍主将）を西王に、副軍師だった馮雲山（後軍主将）を南王に、韋昌輝（右軍主将）を北王にそれぞれ封じた。また左軍主将だった石達開を翼王として「天朝を羽翼」させることにした。この詔は上帝だけが「真の神」であり、地上の支配者が皇帝を名乗ることは許されないという『原道覺世訓』の主張を踏まえうえて、「主」たる天王に続く各王を楊秀清の統率のもとに封じたところに特色があった⁶⁰⁾。

これより前を見ると、太平天国の統治制度は必ずしも内外に対して明確にされていなかった。10月に賽尚阿は上奏の中で次のように述べている。

大股の会匪が永安に入って後、各路の偵察やスパイ……から送られた報告は、あまり

一定しない。あるものは太平王が胡以洗で、一万歳が洪秀全、九千歳が馮雲山、八千歳が羅垂旺（即ち羅大綱）、七千歳が范連得、六千歳が韋正（韋昌輝）であり、偽左輔正軍師が楊秀清、偽右弼又正軍師が蕭朝貴（蕭朝貴）であると述べている……。また太平王は韋正だという者もある。

馮雲山は道士の衣服を着て、軍師を偽称している。胡以洗はまたの名を胡二妹といい、共に三十余歳である。各地のスパイは誰もまだ洪秀全の顔を見たことがない。聞くところでは洪秀全は一日中伏せ隠れており、人に会おうとしない。天父天兄を詐称し、七文字からなる意味不明の詩を作り、天父天兄が作ったものだと言って、人々を惑わしている。⁶¹⁾

このように清朝が曖昧な情報しか入手出来なかった理由は、一つは賽尚阿らの努力不足であり、一つは太平天国の嚴重な警戒により多くの密偵が殺されたためであった。だが洪秀全が人前に姿を見せなかったのも原因の一つであり、11月の上奏でも賽尚阿は「金田の逆匪は太平天国を自称しており……、その首領は確かに太平王であるが、その太平王が果たして韋正であるのか、洪秀全であるかは往々にして供述によって一定しない」⁶²⁾とあるように、捕らえられた上帝会員が正確な知識を持っていなかったと指摘している。つまり五王制の発布は、太平天国が皇上帝（ヤーヴェ）を戴き、洪秀全を君主とする宗教王国であることを確認しながら、楊秀清以下の五人のリーダーを明確に序列づけ、それを会衆に周知させることが目的であったと考えられる。

また11月に洪秀全は全軍に戦闘時の功績と罪を記録、伝達させる詔を出し、12月初めには戦死者と功績のあった将校に対して官職の世襲を認めると宣言した。そこでは拳兵当初に見られた軍長、百長、営長などの職名に代わり、『太平軍目』に見られる両司馬から総制に至る階級制度が明確に示された。これらは太平軍内の組織が整備されたことを示すと共に、「小天堂に到達した時に、もって官職の高低を定める」「(功績が)大きければ丞相に封ぜられ……、小さくとも軍帥職を代々世襲し、天朝で龍袍や角帯を身につけることが出来る……。これほどの威風が他にあるだろうか？」⁶³⁾とあるように、地上の天国を建設した後の栄光を約束することで人々を鼓舞する意図が込められていた。

小島晋治氏はこうした太平天国の「官」志向についてドイツ農民戦争と比較し、農民が農民として解放されず、農民であることを放棄して官への上昇をめざす点で農民戦争とは評価できないと指摘した。また日本の百姓一揆では農民が大名や武士への身分の上昇を要求することは考えられないと述べたうえで、科挙制度によって社会的身分が流動性を帯びた中国社会の特質が、中国の農民反乱に「官となって財産を築く(昇官発財)」という官界への強い上昇志向を刻み込んだと述べている⁶⁴⁾。言い換えれば太平天国は漢族移民(客家)が持っていた中国(漢)文化の正統性に対するこだわりを背景に、自分たちの官界進出を可能とする伝統王朝の創設をめざした復古主義的な運動だったと言えるだろう。

太平天国のこうした伝統的な王朝としての性格は、キリスト教の影響を受けた上帝教の教義とある意味で矛盾していた。それが端的に表れたのは儒教的倫理をめぐる評価であった。すでに別稿で述べたように、上帝教はユダヤ・ヘブライズムの不寛容を受容した結果として、中国既存の諸宗教に対して排他的な攻撃性を帯びていた。それは1847年から各地の廟を打ちこわす偶像破壊運動となって現れ、永安州でも学正（教官）の役所や各地の廟が破壊された⁶⁵。

いっぽう永安州において洪秀全は盧賢拔（平南県花洲人）など知識人の協力を得て、青少年の教育を目的とした『幼学詩』を出版した。そこでは「天朝は厳しきところ、眼前に威厳あり。生かすも殺すも天子の御意、諸官はなべてそむき得ず」とあるように、洪秀全の絶対的な権威を強調していた。また臣下、親子、兄弟、夫婦のあるべき姿について儒教的倫理をもとに解説し、「妻の道は三従にあり。おまえの夫君に逆らうな」⁶⁶などと述べていた。さらに厳格に求められたのが『天条書』第七条に記された男女隔離の思想であった。1852年2月29日に洪秀全は「もし第七の天条を犯す者がいれば、発覚次第すぐに捕らえて斬首してさらし首とし、決して赦してはならない」⁶⁷という詔を発した。男女別営は軍事上の必要から金田団営期から行われた措置であったが、洪秀全がこの禁令にこだわった背後には、中国の民間宗教を「男女混雑」⁶⁸と呼んで貶めてきた儒教知識人の伝統があったと考えられる。

なお永安州時代の太平天国は『太平礼制』『太平詔書』『天命詔旨書』など多くの書籍を出版あるいは編纂した。それらは文中に客家語の口語表現を多く含んでいたために、江南の文人たちに「鄙びていて荒唐無稽」⁶⁹と嘲笑されたが、自分たちの主張を書籍という形を通じて広めようとする努力は、清代の他の農民反乱に見られない特徴だった。また太平天国独自の暦である天暦を作成したのもこの時期で、それは新王朝の創設に不可欠な事業であった⁷⁰。このように太平天国は中国農民反乱の歴史の中でも儒教および儒教的知識人の影響を突出させながら、その統治体制を固めていったのである。

2. 永安州における包圍戦と太平軍の北上

a) 清軍包圍網の問題点と周錫能の肅清事件

さて清朝が太平軍の永安州占領を知ったのは10月13日のことで、太平軍を追撃出来なかった向荣と都統巴清徳の頂戴を取りあげ、賽尚阿の処分を命じた⁷¹。また咸豊帝の叱責を恐れた賽尚阿が、みずから陽朔県へ向かうと報じた上奏の中で向荣、巴清徳が病気を理由に進撃しようとしないと告発すると、11月10日に清朝は一度向荣の提督職を取りあげた⁷²。だが提督代理となった劉長清は将兵を統率出来なかったため、12月に賽尚阿は向荣を永安州西北の古排村へ派遣し、「疲弱」が目立っていた北路軍の再編に当たさせた⁷³。また塩法道許祥光、署右江道張敬修の率いる潮州勇が前線に到着すると、12月10日と29日に烏蘭泰は水秀村の太平軍陣地に攻勢をかけた⁷⁴。

その後も清軍は増派を続け、北路軍には巴清徳が率いる四川、広西兵と天津鎮総兵長瑞



图 1 永安州における太平軍と清軍の配置図 (F.O. 931 1891)

(総兵長寿の兄)の率いる湖南兵、署徐州鎮総兵松安の率いる安徽兵、候補知県陳瑞芝の率いる潮州勇などが派遣された。また候補知府劉繼祖の率いる張釗らの水勇が藤県の濛江口に配置され、桂平県知県李孟群が率いる香山勇、貴県拳人の黄鶴飛が率いる壮勇も戦線に加わった⁷⁵⁾。この結果兵の総数は「四万人余りを下らない」と言われたが、江忠源が「わが軍は官兵と壮勇の気が合わず、兵と将の心が通じず、將軍たちまで仲違いをしている。わが方には死ぬまで力を合わせようという気持ちがなく……、現在の兵で賊を討っても、恐らくは三ヶ月以上経たないと平定出来ないだろう」⁷⁶⁾と述べたように、清軍の足並みは相変わらず揃わなかった。また姚瑩は清軍の実情を次のように分析している。

中堂(賽尚阿をさす)から昨日「諸軍に陣地を攻めると見せかけて、隙に乗じて州城を襲い、首領たちを捕らえて城を回復せよ。守ってばかりいる必要はない」という命令が届いた。まことに妙計であるが、目下諸軍の將に適当な人材はおらず、怯えた病気の兵を率いて毎日戦っても、局地的な勝利を収めるので精一杯である……。

烏[蘭泰]の軍は最も精鋭で、兵力も五、六千いることになっているが、実際は二千七百人に過ぎない。一軍だけで水竇、莫家村両營の賊に対するのは、実に容易なことではない。昨日潮[州]勇二千人を増援に送ってほしいという手紙が来た……。およそ戦いでは兵力のうち五分の二を留守に置かねばならない。そこから兵を二つに分けて水竇を攻めるなら、また一部の兵を莫[家]村の救援に送らねばならず……。実際に戦闘に参加できるのは半分に過ぎない。これは前線に来たことのない人間にはわからないことだ。

このため烏[蘭泰]が潮[州]勇を増援を求めると、[賽尚阿の]側近たちは実情を察せず、「南北の兵勇が万余人もいるのに、どうして賊を殲滅できないのだ?」と言った……。賊は現在ただ陣地を死守して出ず、わが兵が飢え疲れるのを待って、出てきてわが方をからかうなど、実に兵の用い方を知っている。この戦法は「逸をもって労を待つ」といい、わが兵は往復に疲れ、戦闘で疲れてしまうが……。書生たちはこれを知らず、軽々しくそう言うのだ。⁷⁷⁾

ここからは清軍が「疲労」と「病気」のため額面通りの働きが出来なかったこと、烏蘭泰が増援を要請しても、前線の実情を知らない賽尚阿の周囲がこれを認めず、かえって永安州城の奪回を性急に命じたことがわかる。清軍將兵の間にマラリアが流行したのも事実で、「疫病にかかった者が多く、なお出撃が可能な者は十分の五、六に過ぎない」⁷⁸⁾と言われた。また12月には北路軍の都統巴清徳が「瘴氣を積受」⁷⁹⁾したために軍中で病死した。さらに最高司令官である賽尚阿に軍を率いた経験はなく、姚瑩は「時におかしな指示があったが、従わない訳にかず、事が成功しないのは明らかだった」⁸⁰⁾と述べている。咸豊帝は賽尚阿に対して、北京出発時に与えた遏必隆刀を用いて命令に従わない者を斬り、軍紀を肅清する

ように命じた⁸¹⁾。だが賽尚阿本人の「奇策を出して勝利することが全く出来ず、ひたすら誤魔化しばかり。今日は勝利を報じ、翌日は褒美を与えるように求めるが、おおむね虚構」⁸²⁾と言われた無策ぶりに対しては認識が甘かった。

なお烏蘭泰が派遣を要請した潮州勇や広東勇は、清軍内でも紀律の悪い部隊として知られた。12月に広西学政孫鏘鳴は「壮勇はみな統制と指揮に従わない」と述べたうえで、彼らが戦闘で前へ進まないばかりか、「密かに賊と通じる者」もいると告発した。また役に立たない壮勇を解散したところ掠奪をくり返し、代わりに募集した潮州勇も次々と事件を起こしたため、梧州では被害を避けるため「城を閉じること数日」⁸³⁾だったという。

実際のところ、9月に水路軍を追撃していた張敬修の広東勇は太平軍と遭遇しないうちに「紛々と四散」した⁸⁴⁾。また水秀村南方の古眉峽に陣を構えた彼らは、指揮官に分からないように「土音」で太平軍将兵に話しかけ、軍需物資の横流しを含む交易を行った⁸⁵⁾。さらに壮勇は清軍正規兵や他の壮勇とのトラブルが絶えなかった。丁守存によると、1852年3月に潮州勇の二陣地で賭博をきっかけに争いが起こり、「叫び声があがり、鉄砲を撃ち合って負傷者が出」た。また広東勇と潮州勇の間でも械闘が発生したという⁸⁶⁾。



写真1 現存する永安州の城壁



写真3 水秀中営嶺の聖庫跡
(左側は筆者)



写真2 蒙江から水秀(水竇)村を望む

賽尚阿は壮勇について「この連中は利益目当てであり、飢えれば他人を頼り、飽きれば逃散する。張敬修の東勇はその良い証拠だ」と述べつつも、「勇は兵よりも勝る」⁸⁷⁾すなわち彼らの戦闘力が正規兵よりも高いため、彼らを用いざるを得なかったと指摘している。また烏蘭泰は増援の潮州勇が役に立たず、ひそかに太平軍と通じていると考え、彼らが名誉回復のために太平軍陣地を攻撃したいと申し出ても許可しなかった。結局彼らは昭平県の防衛に回され、やがて北路軍に投入されたという⁸⁸⁾。

いっぽう太平軍はいかなる問題を抱えていたのであろうか。永安州東部の穀倉地帯を占領した太平軍が、籠城戦に耐えるだけの食糧を確保していた点はすでに述べたが、彼らは二つの物資の不足に苦しんだ。その一つは火薬と弾丸で、「十二月から今まで、槍炮を放つことは稀となり、もって火薬を省いた」⁸⁹⁾とある。これらは古い土壁を用いた硫黄の製造や清軍の警備が手薄だった昭平県の商人との取引⁹⁰⁾によって補給されたが、李秀成が「永安に囲まれていた時は、斤両の火薬も持たなかった」⁹¹⁾と供述したようにその不足に苦しんだ。また姚瑩は戦いが終わる度に太平軍兵士が陣地から出てきて、清軍が放った弾丸を拾っては攻撃に用いたと指摘している⁹²⁾。

もう一つ不足したのは食塩だった。すでに太平軍は武宣県、象州を転戦していた時に塩の不足に苦しんだが、永安州でも事態は深刻だった。姚瑩によると「数百人を率いる頭目は、食事のたびに少しの塩があったが、残りは塩気のない食事だった」といい、州城内にあった塩館の土を煎じて塩を取ったが、僅かな量にしかならなかったという⁹³⁾。また1852年2月に賽尚阿も、「(太平軍の)米はなお不足していないが、塩、油、おかずや野菜は実にすでに多くない」⁹⁴⁾と報じていた。

それでは太平軍が物資の不足に苦しみながら、半年以上にわたり永安州に留まった目的は何だろうか。それは広東および広西各地に残された上帝会員との合流であったと考えられる。ハンバーグ『洪秀全の幻想』によると、1852年初めに洪秀全は江隆昌を広東へ派遣し、上帝教の信者たちに永安州に来るように促した⁹⁵⁾。そのうち清遠県の穀嶺で蜂起した李興元らは清軍の弾圧を受けて敗北したが⁹⁶⁾、洪秀全の学生であった李瑞生(誉王)は永安州に到着して官職に封じられた。李瑞生は洪秀全が「しばしば手紙と旅費を送ってきた」⁹⁷⁾と述べており、太平軍が永安州に駐屯した重要な目的の一つが彼らとの合流にあったことは間違いない。

また広東信宜県の凌十八が率いる上帝会軍は、本隊との合流を果たせないまま羅定州の羅鏡墟で清軍に包囲されていた。結局凌十八軍は1852年7月にここで壊滅し、後に『天情道理書』で「兄弟と和睦せず、ついに博白、高州でそれぞれ領域を分けた」⁹⁸⁾と批判された。だが太平天国首脳部が永安州を離れるまで、彼らとの合流に望みを捨てていなかった可能性はあると思われる。ちなみに広東に残された馮雲山の親族は清軍に捕らえられた⁹⁹⁾。また穀嶺での蜂起に間に合わなかった洪仁玕(後の干王)が、潜伏先の香港でハンバーグから洗礼を受けたことは良く知られている¹⁰⁰⁾。

ところで戦況が膠着する中で、清軍は密偵を用いた内応工作をもくろんだ。すでに10月20日に清朝は「機に乗じて密かに度胸と智恵のある者を城内に潜入させ、賊情を探ると共に……、内外夾攻のはかりごとをなせ」¹⁰¹⁾という指示を送っていた。そのターゲットとなったのは胡以暁で、彼の弟である胡以暘(生員)は使いの者に手紙を持たせて永安州に派遣し、胡以暁に投降するように勧めた。だが胡以暁は「頑迷」で従わず、その手紙を洪秀全に提出したうえで「狂悖」な返事を送りつけた。そこで烏蘭泰は手紙の中に爆薬を仕込み、胡以暁と洪秀全らを殺害しようと図った。やがて洪秀全が死亡し、胡以暁も自殺したとの情報が流れたが、確認が出来なかったため上奏はされなかったという¹⁰²⁾。

もう一つ永安州における内応工作として、有名なのが周錫能の事件である。この事件は太平天国自身の文献である『天父下凡詔書』『天情道理書』に記載され、下凡した天父(楊秀清)の全知全能ぶりを強調し、「天に逆らった」裏切り者の末路を示すことで会衆に結束を促す宣伝材料として用いられた。それによると太平軍が象州新寨にいた1851年6月に、軍帥の周錫能は博白県に戻って金田団營に間に合わなかった信徒たちを動員するように命じられた。彼は故郷で190名を集めたが、清朝側の警戒が厳しかったため、「妖壯」すなわち清軍の壮勇になりすまし、永安州新墟の清軍陣地に入った。そして周錫能はまず2人の部下を連れて永安州城に戻り、太平軍の本隊と連絡をつけようとした。

ところが12月21日に天父が下凡し、周錫能は監軍朱錫琨(後に丞相)、巡查黄文安(後の昭王、博白県人)を誘って「妖魔のために内攻外応」しようとしていると暴いた。周錫能は初めこれを否定したが、天父の厳しい追及を受けて「妖頭に惑わされ、結託してはかりごとをなし、天朝に戻って軍心を誘惑し、外からの攻撃に応じる」つもりだったと供述した。そして周錫能と彼の妻である蔡晚妹、息子の周理真是公開斬首刑に処せられ、朱錫琨も周錫能の計画をすぐに通報しなかった罪で処罰を受けた。

『天父下凡詔書』には処刑を前にした周錫能夫婦が天父の権威をたたえ、人々に自分たちのような誤りをくり返さないように忠告した部分があるが、いかにも作為的で、そのまま事実とは受けとめられない。周錫能は清軍の陣地で「咸豊妖の舅叔」である賽尚阿に会ったと供述している¹⁰³⁾。9月に賽尚阿は太平軍の金田脱出を報じた上奏で「偽軍帥周錫能」を殺したと報じたが、その元となった張敬修の報告には周錫能の名前がない¹⁰⁴⁾。賽尚阿が別途捕らえられた周錫能の名を挙げて敗戦の責任を免れようとしたのかも知れないが、いずれにせよ清朝側の史料からは内応工作の痕跡は見いだせない。

また金田団營まもなく清軍に捕らえられた李進富の供述によると、博白県から参加した上帝会員は300名ほどで、韋昌輝に率いられていた。厳しい戦いが続く中、博白県や平南県花洲の会員には「心では頭目を恨み」「逃げ出して官兵や団練を助け、彼を殺してやりたいと思っている」者が少なくなかったという¹⁰⁵⁾。とくに博白県や陸川県は楊秀清や蕭朝貴が直接訪れて天父、天兄下凡を行ったという記録がなく、彼らがリーダーシップを握ることを快く思わない会員も多かったと推測される。

結局永安州で周錫能が処罰されて以後、彼の告発に協力した朱錫琨、黄文安らは引き続き太平軍内で活躍したが、陸川県の上帝会首領だった頼世挙（即ち頼九）は太平天国の歴史から姿を消してしまった¹⁰⁶。同じことは紫荊山における馮雲山の布教活動を支え、楊秀清の台頭に反発したとされる大冲村曾氏の人々にも当てはまり、曾玉璟（曾開文の子）が永安州から家族を呼び寄せようと帰郷したところを団練に殺されると、以後彼らの足跡は太平天国の中に見出すことができなくなった¹⁰⁷。

このように考えると、永安州時代の太平天国は統治体制の基礎を固めると共に、楊秀清のイニシアティブを明確にし、それに異を唱える古参会員を肅清した時期だったと見ることが可能であろう。現在周錫能の内応計画が事実だったか、冤罪だったのかを確認する術はないが、「天父のあらざるところなく、知らざるところなく、能わざるところなし」¹⁰⁸と人々に痛感させたこの事件は、宗教的な専制王朝としての太平天国の性格を決定づけたのである。

b) 太平軍の永安州脱出作戦と洪大全問題

さて1852年に入ると、太平軍に比較的有利だった戦局は変化し始めた。その第一の理由は北路軍の再編に乗りだした向荣が「はっきりと条理があり、軍容はこれがために一振」という成果をあげ、古排村から涼亭、石龍口へ陣地を前進させたことにあった¹⁰⁹。この過程で向荣は太平軍陣地に近すぎることを理由に前進を渋った総兵李能臣を解任した¹¹⁰。また李孟群の香山勇、黄鶴飛の壮勇を永安州城北の壬山村、二禄村へ派遣し、「専ら東平里一路を攻め」¹¹¹させた。さらに向荣の部下で綏靖鎮総兵に昇進した和春（後の江南提督）や長瑞、長寿兄弟の活躍などもあり、永安州北面における清軍の重圧は強まった¹¹²。

次に戦況に変化をもたらしたのは大砲の威力だった。向荣が取り寄せた二千斤の大砲は1月28日に戦線へ到着し、翌日から早速実戦で用いられた。2月には烏蘭泰の率いる南路軍にも二千斤、二千五百斤の大砲が配備された¹¹³。これらの大砲は「装填した火薬がやや多く、弾丸がやや大きかったために、一門が破裂して兵五名が死傷した」¹¹⁴とあるように、必ずしも十分な性能を持っていた訳ではなかった。しかし「十発放ったところ、六、七発は賊巢に届いた。賊匪をなぎ倒すところは見えなかったが、捕らえた賊の供述によれば、城内が大砲の攻撃を受けて以来、賊衆は大変驚き慌てた。街中に木の板を使って覆いをかぶせたが、民家数軒が破壊された」という報告から見て、太平軍将兵に与えた心理的影響は小さくなかったと思われる。また南路では太平軍が大砲の設置を阻止しようと図ったが、清軍に撃退されたという¹¹⁵。

第三に挙げられるのは、賽尚阿が永安州の前線に自ら赴いたことであつた。太平軍の鎮圧が進まないことに苛立った咸豊帝は、1月15日の上諭で「該大臣は陽朔に駐屯しているが、永安州とは一百余里も離れており、これまでの軍情に関する報告は確実なのか」¹¹⁶という苦言を呈した。これを受けた賽尚阿は直ちに永安州に向かい、2月15日に州城から3キロ北の上龍横嶺に陣を構えた。彼は「向荣および各鎮將と密かに作戦会議を開き、攻撃の策を練

った」¹¹⁷⁾とあるように州城の早期奪回をめざし、春節期の長雨が一区切りついた3月18日から大砲の威力に物を言わせて攻勢をかけた¹¹⁸⁾。

これらの攻撃は「烏蘭泰は揆帥（賽尚阿）が戦闘を催促したため、大いに強弁をほしいままにした」¹¹⁹⁾とあるように、清朝中央の意向に沿って攻撃を急ぐ賽尚阿と現場の意見が合わなかった。また烏蘭泰が太平軍の完全包囲を提案したのに対して、向荣は包囲網の一角を空けて太平軍を誘き出すという戦略を主張し、「(烏蘭泰は)もとより向荣と合わなかったが、ここに至って互いに益々水火の如き」¹²⁰⁾になるなど主将同士の意見対立も深刻だった。さらに南北の清軍陣地は「各々嫉妬心を抱き、やや模様眺めをしたために成功しなかった」¹²¹⁾とあるように連携を欠いていた。だがこうした制約にもかかわらず、「三方面から合計一千余発を撃ち込み、命中したのは七百余り。家屋で破壊されていないものはなく、撃ち殺した賊匪はその数を知れない」¹²²⁾という結果を生んだのである。

切迫する事態を前に、ついに太平天国首脳部は永安州の脱出を決意した。すでに清軍の攻勢を前に、太平軍は戦線を縮小して戦闘力の維持に努めていた¹²³⁾。またそれまで清軍の防備が手薄だった州東の古蘇冲では、3月29日から封鎖強化のために派遣された参将王夢麟らの兵勇と太平軍の戦いが始まり、30日には馬背嶺、蓮塘で増援の清軍と激戦になった¹²⁴⁾。そして4月4日に洪秀全は全軍の男女に対して次のような詔を出した。

天は妖魔を誅するためになんじらを派遣されたのであり、天父天兄がいつも顧みておられる。男将、女将は悉く刀を持ち、いま着ている服を着替えたなら、心をつにして大胆に妖魔を殺せ。金銀財宝の包みは捨て、俗情をすべて振り払って天を支えよ。さすれば光り輝く黄金の家がお前たちを待っている。高天で福を享け、この上ない威光を身に帯びることが出来るのだ……。各自全力を尽くして忠臣となれ。¹²⁵⁾

ここでは清朝打倒の使命と皇上帝の加護を訴えると共に、全ての財産と私情を捨てて前進するように命じている。この命令が出ると、兵士たちは「遺した輜重、軍械、衣服は数え切れない」「米糧、油塩も多く遺棄されており、倉庫の穀物も動かされていなかった」とあるように、多くの物資を捨てて軽装となり行軍に備えた。太平軍の永安州退出後に「潮勇が多くの衣物を搜獲したところ、黄色い緞子の鞋があり、上には竜と雲が描かれていた。偽太平王の履いた靴であった」¹²⁶⁾といい、洪秀全らも例外ではなかったことがわかる。そして遺棄された物資は、これを拾おうとする清軍兵士の追撃を鈍らせた。

4月5日の夜、おりからの暴風雨に紛れて太平軍の脱出作戦が始まった。その先鋒となったのは羅大綱の率いる兵2,000名で、古蘇冲の玉龍関をめざした。ここは一騎当千と言われる天然の要害で、清軍は安徽寿春兵が守りを固め、元貴州署総兵の李瑞を増援に派遣していた。しかし李瑞軍の陣地構築が間に合わないうちに太平軍の急襲を受け、「賊は悉く精鋭で進攻したため、攻撃は甚だ鋭く、辰刻から酉刻（午前7時から午後5時）に至り、官兵は

支えられなくなった」¹²⁷⁾とあるように敗走した。こうして突破口を作った太平軍は、楊秀清の率いる本隊も古蘇冲口を無事に通過した。

いっぽう水秀村の守備に当たっていた秦日綱の兵 2,000 名は、後衛部隊として主力の古蘇冲口通過を支援した。だが彼らは 4 月 7 日に古蘇冲の東にある平冲で清軍に捕捉され、大きな損害を受けた¹²⁸⁾。この知らせを受けた洪秀全らは報復を決意し、夜のうちに平冲から崩冲に至る谷あいの両山頂に全軍を配置した。この時向荣は兵が 2 日間の追撃戦で疲れており、10 月に総兵李伏がこの地で太平軍に敗北した経験から、慎重に軍を進めるように主張した。だが勝利に興奮した烏蘭泰はこれを聞きいれず、みずから貴州兵を率いて山を下り、兵を進めた。向荣らの各軍も彼に続かざるをえなかった¹²⁹⁾。

はたして 4 月 8 日の早朝、烏蘭泰は前方の村に煙が上っているのを発見した。すると太平軍が山上から「必死になって一死戦を決せん」と攻撃を開始した。このとき大雨に加えて辺りは霧が立ちこめ、清軍将兵は「一寸先も互いに顧みることができず、数丈も離れば人の叫び声だけで、敵味方の区別がつかなかった」とあるように混乱に陥った。後続の湖南兵は救援に向かったが、「道幅が狭く、雨のため泥でぬかるみ、下に降りることは出来ても登ることは難しかった。前隊の兵は次々と傷つき倒れ、援軍もただ命を捨てて前進することしか出来なかった」と苦戦した。向荣と烏蘭泰は軍を返そうとしたが、曲がりくねった道の「上は絶壁、下は深い谷であり……、行動は迅速にできなかった。賊衆が追いつがり、わが兵で崖の下に転落する者が続出」したという。

結局この戦いで清軍は長瑞、長寿兄弟に河北鎮総兵董光甲、鄖陽鎮総兵邵鶴齡の 4 名の総兵を失い、向荣の北路軍を中心に 1,000 名以上の死者を出した。烏蘭泰は一度谷底へ転落し、なんとか自力で脱出したが、もはや太平軍を追撃する余力は残っていなかった¹³⁰⁾。その後太平軍が三妹山のヤオ族地区に入ったとの情報が入り、東の平樂あるいは梧州へ進出することが予想された。4 月 20 日に両広総督徐広縉は広東巡撫葉名琛に送った手紙の中で、太平軍が府江を渡って賀県に入り、広東へ進出することは憂慮すべきだが、渡河に必要な船はすでに撤去していると指摘した。また太平軍は数日分の食糧しか携行しておらず、「追撃の兵も少なくないので、永安の情形に比べれば対処しやすい」¹³¹⁾などと楽観的な予想を述べていた。少なくとも太平軍が北に進路を変えて桂林を急襲したのは、彼らにとって青天の霹靂であったことだろう。

さて清軍は 4 月 7 日の戦闘において洪大全なる人物を捕らえた。彼は天徳王を名のり、洪秀全の弟分であると主張したため、賽尚阿はぶざまな敗戦を取り繕うための「戦果」として彼を「賊中の大頭目」とであると大々的に報じた¹³²⁾。初期太平天国の歴史に多くの論争を巻きおこした洪大全については、現在北京と台湾に供述書が所蔵されているが、内容は同じである。また近年鍾文典氏が彼の族譜を紹介し、関連する檔案史料が多く公開されたので、この問題について筆者なりの検討を加えてみたい。

まず洪大全の本名は焦玉昌といい、従来知られていた焦亮という名は彼の号であった。そ

の出身地も湖南郴州興寧県で、衡州府人という供述書の内容は偽証であったことがわかる。1855年に広東天地会に呼应して蜂起した郴州反乱軍の首領焦三（本名焦玉晶）は洪大全の弟であり、「大元帥」の許月桂は彼の妻（ただし族譜によると妻は謝氏）であった。また洪大全は「県試で場を失う」など科挙受験に失敗したが、弟の焦玉明は生員となって長沙の岳麓書院などで学んだ¹³³⁾。ここから洪大全が天地会の関係者であること、それなりの経済的基盤を持った下層知識人であったことが確認される。

次に太平天国に参加した経緯について、洪大全は二つの説明をしている。一つは逮捕直後の供述書で、「数年前に広東へ行った時に、ついに花県人の洪秀全、馮雲山と知り合った」とあるように広東時代の洪秀全と面識があり、金田団營と共に太平軍に参加したと述べている¹³⁴⁾。もう一つは彼が北京へ護送された後に提出した上書で、1851年3月頃に欽差大臣李星沅を訪ねて献策をしたが「辱罵」を受け、山中で自殺しようとしたところ胡以暘と出会い、洪秀全に引きあわされたと語っている¹³⁵⁾。

おりしも太平軍が永安州を占領して間もない1851年10月に、湖南では衡州で左家発の組織した天地会（金丹教）が摘発され、広東老万山（狗頭山）に潜伏する朱九濤（太平王）、李丹（平地王）に対する捜索が行われた¹³⁶⁾。捕らえられた洪大全は取調べの官員に言われるまま、「湖南、広東会衆首領名单」において朱九濤、李丹の名前を挙げたため、あたかも彼が広東、湖南、広西の天地会と太平天国を結びつける重要人物という印象を人々に与えた¹³⁷⁾。だが実際のところ洪大全は広西東部に多く流入していた湖南移民の一人に過ぎなかった。彼と天地会の関係および太平軍加入の経緯も、1847年に平楽で蜂起した羅三鳳反乱軍あるいは上帝会との連携を図って失敗した陳亜貴反乱軍の生き残りで、羅大綱との関係を通じて太平軍に参加したのではないかと推測される¹³⁸⁾。

むしろ洪大全を特徴づけたのは現状に不満を持ち、上昇のチャンスを窺う下層知識人としての姿であった。1849年に彼の故郷である郴州では、童試の受験生であった李佐周らが「富童」すなわち豊かな家の子弟と差役が結託して不正を働いていると訴え、試験を妨害する事件が発生した¹³⁹⁾。当時広東では地方政府に不信感を募らせた知識人が、科挙試験をボイコットして要求の実現を図る事件が度々起きていた¹⁴⁰⁾。洪大全も科挙に落第して「心中は忿懣やる方なかった」と述べているが、この社会に対する強い不満こそは彼を天地会と太平天国に参加させた第一の要因であったと考えられよう。

また永安州時代の太平天国は王朝体制を整えるべく、知識人の参加と協力を必要としていた。李瑞生が広東から呼び寄せられたのはその一例であり、洪大全が厚遇されたのも「兵書を読むこと少なからず、古来の戦陣、兵法は皆心に留めた」¹⁴¹⁾という知識であったと考えられる。むしろ彼が天徳王を名乗ったのは、天地会員に参加を促す広告塔の役割を期待されたためであり、彼が捕らえられると天徳王の称号も他人に取って代わられた¹⁴²⁾。だが「女色」に耽った洪秀全が36人の妃を立て、洪大全がこれを諫めたといった話は、李進富の「（洪秀全らの）妻妾は三十六人」¹⁴³⁾という供述と符合する。洪大全の「一切の用兵について私の

教えを請うた」という主張は割り引かねばならないが、彼が当時の太平天国において「先生」としてある種の影響力を持っていたことは事実であろう。

それでは洪大全はなぜ太平天国の歴史から姿を消してしまったのだろうか？ 洪大全自身が語ったところによると、彼は太平天国からの離脱を図って捕らえられ、獄中に監禁されていたという。もともと洪大全は「将来多くの地方を手に入れたら、自分の大事をなす」とあるように、王位を篡奪する意志を持っていたようである。だが彼と洪秀全の意見の食い違いが顕著となったのは、「天父天兄および耶穌などの名目を立て、天兄の降臨と称して、全てのことが天父に聞けばわかるとした」という太平天国の宗教性であった。

洪大全は上帝教に対して「彼の妖術は古来事を成しえたことがない」と否定的な立場を取り、とりわけ楊秀清が兵権を統括することに嫌悪感を抱いていた。献策が受け入れられないことに苛立った彼は、「なんじの天父、天兄がいるのであれば、私はどうして用いられようか？」¹⁴⁴⁾とまで言っている。このように考えると、東王楊秀清のイニシアティブの下で宗教的な専制王朝としての性格を強め、反対勢力の粛清を断行した永安州時代の太平天国において、洪大全がその存在を容認されなかった理由も明らかとなる。彼は太平軍の首領 26 名のリストに周錫能事件で処罰された朱錫琨に加え、大冲村曾氏の一員と見られる曾玉琇の名前を挙げている¹⁴⁵⁾。それは洪大全が一部の古参会員と同じく、太平天国の歴史の中で淘汰される運命にあったことを象徴的に示していると言えよう。

小 結

本稿は永安州時代の太平天国について考察した。永安州を急襲した太平軍は州城を中心とする東部盆地を 6 ヶ月余りにわたって占領した。この地区は客家が多く、清軍の包囲体制もすぐに整わなかったため、太平天国は比較的安定した地域経営を行って王朝体制の基礎を整えた。その内容は洪秀全と五王とくに楊秀清を中心とする宗教的な専制支配であり、人々は忠誠を尽くすことで地上の天国における官職の世襲を約束された。また太平天国はキリスト教の影響を受けつつも、実際の社会建設においては儒教的な色彩を強く帯びていた。その担い手は下層の知識人であり、太平天国は出版事業や独自の暦の作成に取り組むなど、中国歴代の農民反乱と比べても儒教知識人の影響が突出していた。

当初太平軍の動きに対応出来なかった清軍は、烏蘭泰（南路軍）と向荣（北路軍）の努力によって軍の立て直しと包囲網の形成に努めた。むろん将兵の低い士気や規律の悪さ、敗戦を糊塗する虚偽報告、指揮官の反目といった清軍の問題点は相変わらず存在した。しかし咸豊帝の催促を受けた賽尚阿が永安州の前線に到着し、みずから大砲による攻撃を試みると、太平軍は防戦に追われるようになった。そして洪秀全は広東の会衆との合流に見切りをつけ、永安州からの脱出作戦を発動した。この戦いで太平軍は後衛部隊を中心に大きな損害を受けたが、清軍も総兵 4 名が戦死するという大打撃をこうむった。そして太平軍は東進を予想していた清軍の裏をかき、省都桂林を急襲したのである。

ところで永安州時代の太平天国は政権の基盤作りをただけでなく、東王楊秀清のイニシアティブを確立し、これに従わない古参会員を肅清した時期でもあった。本稿は永安州で発生した周錫能の内応未遂事件について検討し、清朝側の史料からは計画の存在を確認出来ないこと、紫荊山の大沖村曾氏や陸川県の頼世挙など、この時期に太平天国の歴史から姿を消してしまった人々も少なくないことを指摘した。

また永安州脱出戦で清軍に捕らえられた洪大全についても、湖南、広東、広西の天地会と太平天国をつなぐ重要人物という従来の見解とは別に、現状に不満を抱いていた下層知識人という視点から分析を加えた。そして洪大全の話には誇張された部分が多いが、当時の太平天国が知識人に協力を求めていたのは事実であったこと、洪大全が遠ざけられた理由は太平天国の宗教性とりわけ楊秀清の宗教的権威に対する彼の批判的な言説にあったことを明らかにした。

このように考えると永安州時代の太平天国は、延安時代の中国共産党と多くの類似点を持っていることに驚かされる。それは敵の経済封鎖の中で自力更生をめざした生き残り戦略や下層農民の支持を取りつけた経済政策に止まらない。指導者層のイデオロギー闘争や反主流派に対する容赦ない肅清は、あたかも毛沢東の政治的権威を確立した整風運動を彷彿させる。こうした共通点は中国社会が元々抱えていた抑圧的な体質によるものか、マルクス主義を通じて再度受容されたユダヤ・キリスト教の不寛容による影響か、安易な結論を下すことは出来ない。だが本稿の分析を通じて、客観的な立場から太平天国史を再構成することの現代的意義を改めて確認できたと思われる。

その後桂林攻撃に失敗して湖南へ向かった太平天国と、本隊との合流を果たせずに広東で全滅した凌十八軍の歴史については、それぞれ別の機会に詳述することにした。

註

- 1) 菊池秀明『広西移民社会と太平天国』【本文編】【史料編】風響社、1998年。
- 2) 菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』汲古書院、2008年。
- 3) 菊池秀明「広西における上帝会の発展と金田団營」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』35、2009年。
- 4) 菊池秀明「金田団營後期の太平天国をめぐる諸問題」高知大学史学科編『海南史学』47号、2009年。
- 5) 簡又文『太平軍広西首義史』商務印書館、1944年。同『太平天国全史』香港猛進書屋、1962年。崔之清主編『太平天国戦争全史』1、太平軍興、南京大学出版社、2002年。なお抗日戦争期に簡又文氏は太平天国関係の書籍を携えて蒙山県に避難し、フィールドワークを行いながら研究を続けたという。
- 6) 鍾文典『太平軍在永安』三聯書店、1962年。同『太平天国人物』广西人民出版社、1984年。同『太平天国開国史』广西人民出版社、1992年。
- 7) 何秉「太平天国起義前夜の永安社会」両広紀念太平天国起義135周年學術研討會參加論文。劉海寿主編『永安州与太平天国』香港天馬図書有限公司、2001年。また蒙山県志辦公室編『太平天

国農民革命在永安資料專輯』蒙山県印刷廠、1986年。

- 8) この調査については菊池秀明「老長毛の故郷にて——広西留学雜記'87～90」（中国民衆史研究会編『老百姓の世界』5、1989年所収）を参照のこと。なお1996年の調査では澤田晃治氏（立命館大学大学院）の協力を得た。記して感謝したい。
- 9) 中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』第1-26冊、光明日報出版社および中国社会科学出版社、1990-2001年（以下『鎮圧』と略称）。
- 10) 菊池秀明「英国 National Archives 所蔵の太平天国史料について」中国文史哲研究会編『集刊東洋学』102号、2009年。
- 11) 賽尚阿奏、咸豐元年閏八月初四日・閏八月初九日『鎮圧』2、278・284頁。
- 12) 光緒『永安州志』巻4、兵志、己酉以来十九年兵事記略、広西区図書館蔵。また鍾文典『太平軍在永安』11頁によると、24日夜に太平軍は州城の周囲で馬に石の塊を引かせたり、爆竹を打ち鳴らし、夜襲にみせかけて清軍守備隊の疲労を誘ったという。
- 13) 光緒『永安州志』巻4、功烈。知州呉江の死については秦煥「清永安州知州呉江墓誌銘」（1884年立、『永安州与太平天国』256頁所収）および鍾文典『太平天国開国史』221頁を参照のこと。また蘇保徳は清仏戦争で名を馳せた広西提督蘇元春の父であった（簡又文『太平天国全史』上冊、310頁）。
- 14) 光緒『永安州志』巻1、地志、城郭および「捐修永安州城等項碑記」（同書巻1）。
- 15) 張徳堅『賊情彙纂』巻6、偽礼制（中国近代史資料叢刊『太平天国』3、神州国光社、1952年、164頁）。
- 16) 賽尚阿奏、咸豐元年閏八月十四日『鎮圧』2、303頁。覃瀚元は藤県大黎周村人、チワン族土官だった五屯覃氏の末裔で、太平天国とは深い縁がある。彼は清軍について従軍し、多くの情報を提供したため『賊情彙纂』巻首、採訪姓氏にその名が見える（『太平天国』3、39頁）、また後に湖北巡撫胡林翼に取り立てられて黄梅県知県となったが、1859年に洪仁玕が香港から南京へ向かう途中で黄梅県に立ち寄り、覃瀚元の援助を受けたという（洪仁玕親供、中国近代史資料叢刊統編『太平天国』2、広西師範大学出版社、2004年、406頁）。なお菊池秀明『広西移民社会と太平天国』【本文編】527頁を参照のこと。
- 17) 覃漢陽口述、咸豐元年閏八月十八日『鎮圧』2、306頁。
- 18) 命兵將殺妖取城所得財物盡燬婦天朝聖庫詔、太平天国辛開元年又八月初七日、太平天国歴史博物館編『太平天国文書彙編』中華書局、1979年、33頁。
- 19) Callery et Yvan, *History of the Insurrection in China with Preface and a Supplementary Chapter*, London, 1853（徐健竹訳『太平天国初期紀事』上海古籍出版社、1982年、65頁）。
- 20) 丁守存『從軍日記』（太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』2、中華書局、1962年、310頁）。
- 21) 覃漢陽口述。また姚瑩「与呉署方伯」は「賊踞永安、而以精銳立營於水竇、莫村、互為声援」と述べている（『中復堂遺稿』巻5、太平天国革命時期広西農民起義資料編輯組編『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、中華書局、1978年、193頁）。
- 22) 賽尚阿奏、咸豐元年閏八月初九日『鎮圧』2、284頁。
- 23) 賽尚阿奏、咸豐元年閏八月十九日『鎮圧』2、321頁。
- 24) 姚瑩「踞荔浦県報言事狀」咸豐元年閏八月初八日『中復堂遺稿統編』巻1（『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、194頁）。
- 25) 丁守存『從軍日記』（『太平天国史料叢編簡輯』2、291頁）。

- 26) 賽尚阿奏、咸豐元年閏八月初九日『鎮庄』2、284頁。
- 27) 姚瑩「復鄒中丞言事狀」咸豐元年閏八月十三日『中復堂遺稿統編』卷1（『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、193頁）。
- 28) 賽尚阿奏、咸豐元年閏八月二十七日『鎮庄』2、344頁。
- 29) 姚瑩「再与嚴觀察書」咸豐元年閏八月二十一日『中復堂遺稿統編』卷1（『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、196頁）。
- 30) 『烏蘭泰函牘』卷上、十（『太平天国』8、690頁）。
- 31) 姚瑩「与吳署方伯」。
- 32) 姚瑩「復鄒中丞言事狀」。
- 33) 賽尚阿奏、咸豐元年九月二十三日『鎮庄』2、417・424頁。
- 34) 華翼綸「寄鄒中丞書」『中復堂遺稿統編』卷2、附録。
- 35) 雍正『広西通志』卷93、諸蛮。また嘉慶『永安州志』卷10、宦績、広西区図書館蔵によると、康熙年間の知州だった鄧林尹、陳大鞏はヤオ族の統制強化と漢化政策を推し進めた。
- 36) 秀才村閔氏の始祖閔統は明代万暦年間に広東高明県から永安州に移住した（秀才三石村『閔氏族譜』閔慶三序文、1927年修、何秉氏抄本）。
- 37) 大龍村楊氏の始祖楊倫は陝西華陰人で、三藩の乱を鎮圧するために広西平樂府へ派遣され、永安州に定着したという（嘉慶『永安州志』卷11）。
- 38) 莫家村『莫氏族譜』（1925年修、何秉氏抄本）の序文および莫戰招撫牌照（1598年）、永安州莫氏免夫照（1797年）。また光緒『永安州志』卷6、人物。
- 39) 何秉「太平天国起義前夜の永安社会」。
- 40) 『広西郷試珠卷』光緒己卯科、孔慶麟、広西桂林図書館蔵。
- 41) 『甘棠李春榮母墓誌』1910年修、何秉氏抄本。
- 42) 光緒『永安州志』卷1、地志下、序文。
- 43) 姚瑩「踞荔浦県報言事狀」。
- 44) 姚瑩「查復禁絶賊營接濟狀」咸豐二年正月初十日・同「復陳断賊接濟狀」二月初十日『中復堂遺稿』卷4（『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、211・212頁）。
- 45) 鍾文典『太平軍在永安』39頁。同『太平天国開国史』227頁。
- 46) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、中国社会科学出版社、1995年、117頁。
- 47) 『天朝田畝制度』（『太平天国』1、322頁）。
- 48) 1987年調査記録。また『太平天国農民革命在永安資料專輯』66頁によると、中營嶺の聖庫跡は東西の寛さが100メートルほどで、周囲には土壘が築かれ、秦日綱の部隊が駐屯していた。
- 49) 曾國藩「密陳巡閱諸軍情況及可喜可惧形勢片」（同治二年二月二十七日）『曾國藩全集』奏稿6、岳麓書社、1989年、3171頁。
- 50) 何秉「太平天国起義前夜の永安社会」。ただし広東に文明県なる地名は存在しない。
- 51) 光緒『永安州志』卷6、人物。
- 52) 夏朝村『劉氏族譜』（何秉氏抄本）。また調査によると、劉氏は劉玉球の他に16人が太平軍に参加した。
- 53) 『吳興邑姚氏族譜』撰修年代不明、蒙山県烟草公司姚廷燊蔵。また姚受爵については光緒『永安州志』卷6、人物志、文職。
- 54) 蒙山県『西馬陸氏家譜』1926年陸盛瑛著述、藤県大黎郷古制村陸勤昌蔵（菊池秀明『広西移民社会と太平天国』【史料編】587頁）。

- 55) 光緒『永安州志』卷4、兵志、功烈。
- 56) 「李家府君挺生行状」『永安州与太平天国』255頁。また平崗堡土舍李氏については嘉慶『永安州志』卷13、武備、土舍。
- 57) 姚瑩「示諭永安州士民文」。
- 58) 「捐修永安州城等項碑記」(光緒『永安州志』卷1、地志)および簡又文『太平天国全史』上、315頁の梁渭川述。
- 59) 1958年広朗村陸昌富述『永安州与太平天国』276頁。
- 60) 永安封五王詔、辛開元年十月二十五日『太平天国文書彙編』35頁。
- 61) 賽尚阿奏、咸豐元年九月初八日『鎮圧』2、378頁。また文中にある范連得について、同じ日に送られた賽尚阿の上奏には「素通会匪之土匪」とあり、「私仇」のため永安州攻撃を試みて団練に撃退されたが、胡以晄を誘って永安州を陥落させたという(『鎮圧』2、374頁)。また姚瑩は彼と羅大綱が「上年平樂漏網之人」即ち1847年の羅三鳳を中心とする天地会反乱軍のメンバーだったと述べている(「據荔浦県報言事状」『中復堂遺稿統編』卷1、『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、194頁)。さらに『広西昭忠録』卷1の呉江伝には、呉江が何洪基なる人物を処罰したところ、その仲間が報復のため太平軍に投じたとあり、范連得は何洪基の一派かも知れない。なお光緒『永安州志』卷4、兵志、己酉以来十九年兵事記略によると、永安州城は1850年に「平南賊」の攻撃を受け、団練が撃退した。鍾文典『太平天国開国史』219頁を参照のこと。
- 62) 賽尚阿奏、咸豐元年九月二十六日『鎮圧』2、407頁。
- 63) 令各軍記功記罪詔、辛開元年九月二十五日『太平天国文書彙編』34頁。諭兵將立志頂天真忠報国到底詔、同年十月十二日、同書34頁。
- 64) 小島晋治「太平天国運動の特質——ドイツ農民戦争と比較して」『太平天国運動と現代中国』研文出版、1993年、131頁。
- 65) 重修永安州儒学正署碑記、1883年、光緒『永安州志』卷1、地志。
- 66) 『幼学詩』『太平天国』1、229頁(西順蔵編『原典中国近代思想史』1、岩波書店、1976年、308頁)。
- 67) 嚴命犯第七天条殺不赦詔、太平天国壬子二年正月二十七日『太平天国文書彙編』36頁。
- 68) 澤田瑞穂『校注・破邪詳弁——中国民間宗教結社研究資料』第一書房、1972年。
- 69) 張德堅『賊情彙纂』卷9、賊教、偽書(『太平天国』3、252頁)。また鍾文典「客家与太平天国革命」『広西師範大学学报』1989年1期。
- 70) 1852年3月に清軍は戦場で「逆書」を拾得したが、それは「妄改正朔」即ち清朝の暦を変更していた。『太平曆書』と考えられ、これを見た賽尚阿は「我朝二百餘年、小醜不靖者間亦有之、而似此狂悖實從來所未聞」と報じている(賽尚阿奏、咸豐二年二月初六日『鎮圧』3、13頁)。また鍾文典『太平天国開国史』264頁。
- 71) 諭内閣、咸豐元年閏八月十九日『鎮圧』2、396頁。
- 72) 賽尚阿奏、咸豐元年九月初八日『鎮圧』2、374頁。軍機大臣、咸豐元年九月十八日『鎮圧』2、396頁。
- 73) 賽尚阿奏、咸豐元年十一月十五日『鎮圧』2、522頁。
- 74) 賽尚阿奏、咸豐元年十二月初六日『鎮圧』2、565頁。
- 75) 簡又文『太平天国全史』上冊、318頁。また鍾文典『太平軍在永安』61頁によると、清軍の総兵力は推計で4万6000人であったという。

- 76) 江忠源「致彭曉杭書」『江忠烈公遺集』巻1。
- 77) 姚瑩「十九日進攻報中丞狀」咸豐元年九月二十日『中復堂遺稿』巻3（『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、207頁）。
- 78) 賽尚阿奏、咸豐元年十二月初六日『宮中檔咸豐朝奏摺』4、94頁。また清軍は病気の兵勇が大半を占め、長瑞らも重病に苦しんだという（同奏、咸豐元年十二月二十九日『鎮圧』2、588頁）。
- 79) 賽尚阿奏、咸豐元年十一月初九日『宮中檔咸豐朝奏摺』3、680頁。
- 80) 姚瑩「十九日進攻報中丞狀」。
- 81) 諭内閣、咸豐元年十二月十九日『鎮圧』2、578頁。
- 82) 孫鏘鳴奏、咸豐二年四月頃、F.O. 931 1330号、英国 National Archives 蔵。なお賽尚阿が「調度無方、号令不明、賞罰失当」を理由に解任されたのは太平軍の長沙攻撃後のことであった。
- 83) 孫鏘鳴奏、咸豐元年正月十九日、軍機処檔 083088号、台湾故宮博物院蔵。
- 84) 賽尚阿奏、咸豐元年閏八月十六日『鎮圧』2、308頁。この戦いで張敬修は「憤懣」の余り一度は川に身を投げ、救出された後は別に壮勇を募集した。だがこの新潮勇も戦力としては当てにならず、12月10日の戦いでは彼らが突然逃走したために、取り残された湖南兵300名が戦死したという（丁守存『従軍日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、298頁および賽尚阿奏、咸豐元年十一月十五日『鎮圧』2、522頁）。
- 85) 龍啓瑞紀事詩『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、254頁。
- 86) 丁守存『従軍日記』（『太平天国史料叢編簡輯』2、306・308頁）。
- 87) 賽尚阿奏、咸豐元年十一月初九日『宮中檔咸豐朝奏摺』3、680頁。
- 88) 丁守存『従軍日記』（『太平天国史料叢編簡輯』2、300頁）。
- 89) 姚瑩「查復禁絶賊營接濟狀」咸豐二年正月初十日『中復堂遺集』巻4（『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、211頁）。
- 90) 姚瑩「復陳断賊接濟狀」咸豐二年二月初十日『中復堂遺集』巻4（『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、212頁）。同史料によると昭平県の孟冲に通じるルートは「奸民」が太平軍と取引していたため、昭平県の団練に封鎖させた。また丁守存『従軍日記』によると、1852年3月3日に「捉得送火藥賊殺之」という（『太平天国史料叢編簡輯』2、306頁）。
- 91) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、118頁。なお李秀成によると、太平軍がまとまった量の火薬を入手したのは、永安州脱出戦で安徽寿春兵の火薬を奪取してからであった。
- 92) 姚瑩「復陳断賊接濟狀」。
- 93) 姚瑩「查復禁絶賊營接濟狀」「復陳断賊接濟狀」。
- 94) 賽尚阿奏、咸豐元年十二月二十九日『鎮圧』2、588頁。
- 95) Theodore Hamberg, *The Visions of Hung Siutshuen and Origin of the Kwangsi Insurrection*, Hongkong, 1854, 59（青木富太郎訳『洪秀全の幻想』生活社、1940年、148頁）。
- 96) 『李氏族譜』（陳周棠主編『廣東地区太平天国史料選編』廣東人民出版社、1986年、105頁）。民国『清遠県志』巻14はこの蜂起の指導者を李北養、聞き取り調査では李亜楷としている。
- 97) 李瑞生供詞（羅爾綱、王慶成主編、中国近代史資料叢刊続編『太平天国』広西師範大学出版社、2004年、443頁）。また小島晋治「故宮博物院（台北）所蔵太平天国諸王の供述の記録」（神奈川大学中国語学科編『中国民衆史への視座——新シノロジー・歴史篇』東方書店、1998年、55頁）。
- 98) 『天情道理書』（『太平天国』1、386頁）。
- 99) 馮雲山之弟馮亜戊供詞（咸豐元年 F.O. 931 1279）、処置馮雲山家属呈文（咸豐五年 F.O. 931

- 1594)。その内容によれば、馮雲山の母親と妻、弟馮亜戊は1851年に、彼の息子である馮亜養、馮癸茂も1853年以後に捕らえられた。またハンバーグ『洪秀全の幻想』によると、彼の長男である馮亜芳は広州で潜伏中に逮捕された。また次男は1853年にI. J. ロバーツと共に上海へ到達したという (p. 62、訳書154頁)。
- 100) 倉田明子「洪仁玕とキリスト教——香港滞在期の洪仁玕」『中国研究月報』641号、2001年。
- 101) 軍機大臣、咸豊元年閏八月二十六日『鎮圧』2、342頁。
- 102) 丁守存『従軍日記』(『太平天国史料叢編簡輯』2、300頁)。
- 103) 『天父下凡詔書一』(『太平天国』1、7頁)。『天情道理書』(同書1、376頁)。
- 104) 賽尚阿奏、咸豊元年閏八月初三日『鎮圧』2、273頁。張敬修稟、咸豊元年八月、F.O. 931 1903号。
- 105) 李進富供詞、咸豊元年、F.O. 931 1041号。また小島晋治「初期太平天国兵士十名の供述書」『東京大学人文科学紀要』75、1982年(同『太平天国運動と現代中国』研文出版、1993年、85頁)。
- 106) 民国『陸川県志』巻21、兵事編。また菊池秀明「広西における上帝会の発展と金田団營」。
- 107) 合水『武城曾氏族譜』民国33年修、合水村曾家寧藏。また王慶成「訪問金田、紫荆」『太平天国的歴史と思想』中華書局、1985年、508頁。
- 108) 『天父下凡詔書一』(『太平天国』1、18頁)。
- 109) 丁守存『従軍日記』(『太平天国史料叢編簡輯』2、299頁)。
- 110) 賽尚阿奏、咸豊元年十二月初六日『宮中檔咸豊朝奏摺』4、81頁。
- 111) 賽尚阿奏、咸豊元年十一月十五日『鎮圧』2、522頁。
- 112) 和春らは向榮の陣地構築を援護し、1月24日には東西両砲台と紅廟付近で太平軍と交戦した。また3月30日にも馬背嶺で太平軍と戦った(賽尚阿奏、咸豊元年十二月初六日・同二十九日『鎮圧』2、565・590頁。同奏、咸豊二年二月十六日『鎮圧』3、35頁)。
- 113) 賽尚阿奏、咸豊元年十二月二十九日『鎮圧』2、590頁。
- 114) 丁守存『従軍日記』(『太平天国史料叢編簡輯』2、303頁)。
- 115) 賽尚阿奏、咸豊元年十二月二十九日『鎮圧』2、590頁。
- 116) 軍機大臣、咸豊元年十一月二十五日『鎮圧』2、557頁。
- 117) 賽尚阿奏、咸豊元年十二月二十九日『鎮圧』2、590頁。
- 118) 賽尚阿奏、咸豊二年二月初六日『鎮圧』3、13頁。
- 119) 丁守存『従軍日記』(『太平天国史料叢編簡輯』2、306頁)。
- 120) 『清史稿』巻392、列伝179、賽尚阿(中華書局版、1977年、11747頁)。また丁守存『従軍日記』は烏蘭泰が永安州北面に築かれた「長圉」を東側にも延長すれば、「賊万不能飛越矣」とであると主張したが採用されなかったと述べている(『太平天国史料叢編簡輯』2、307頁)。
- 121) 丁守存『従軍日記』(『太平天国史料叢編簡輯』2、305頁)。
- 122) 賽尚阿奏、咸豊二年二月初六日『鎮圧』3、13頁。
- 123) 鍾文典『太平軍在永安』112頁によると、太平軍は蒙江西岸にあった團嶺、龍虎嶺、銅盆村の陣地から退き、六廟村、三叉村、新村から廻龍村へ至る防衛ラインを維持しようとした。
- 124) 賽尚阿奏、咸豊二年二月十六日・二月二十七日『鎮圧』3、39・51頁。
- 125) 永安破圍詔、太平天国壬子二年二月三十日『太平天国文書彙編』37頁。
- 126) 丁守存『従軍日記』(『太平天国史料叢編簡輯』2、310・311頁)。
- 127) 光緒『永安州志』巻4、兵志、己酉以來十九年兵事記略。
- 128) 賽尚阿奏、咸豊二年二月二十七日『鎮圧』3、51頁。なお賽尚阿は太平軍の損害について「総計

- 両日殺賊実不止二三千名、生擒百余名」と述べている。また李秀成も「殺死天朝官兵男女二千余人」と供述している（羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、119頁）。
- 129) 賽尚阿奏、咸豊二年二月二十七日『鎮庄』3、51頁。また烏蘭泰が向荣の諫めを聞かず、軍を進めた点については汪堃『盾鼻隨聞録』巻1、粵寇紀略（『太平天国』4、358頁）および「龍啓瑞紀事詩」（『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、254頁）、華翼綸『荔雨軒文集』巻3、双忠伝などに詳しい。
- 130) 賽尚阿奏、咸豊二年二月二十七日『鎮庄』3、51頁。この戦いにおける清軍の死者数は史料によって異なり、李秀成は4-5,000人と供述している（羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、119頁）。また姚瑩は800人（姚瑩「与嚴方伯」『中復堂遺集』巻5、『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、216頁）、光緒『永安州志』は1,000名余りと述べているが、総兵4名の他にも參將田学韜など多くの將校を失ったことを考えると、敗戦の責任を免れるべく過小に報告した可能性が高い。簡又文氏は4-5,000人は多すぎるとしたうえで、太平軍の損失よりも多い2-3,000人が妥当なところではないかと述べている（簡又文『太平天国全史』上冊、329頁）。
- 131) 徐広縉致葉名琛の信、咸豊二年三月初二日、F.O. 931 1301号。
- 132) 賽尚阿奏、咸豊二年二月二十七日『鎮庄』3、51頁。
- 133) 『興寧焦氏統緒族譜』1914年、焦左泉主編、郴州地区教育委員会張劍生氏提供（鍾文典『太平天国開国史』299頁）。
- 134) 洪大全供詞、咸豊二年二月二十七日『鎮庄』3、58頁。
- 135) 洪大全上咸豊帝表文、咸豊二年四月二十六日『鎮庄』3、239頁。
- 136) 程喬采奏、咸豊元年閏八月二十二日・九月二十七日『鎮庄』2、335・431頁。
- 137) 洪大全供湖南広東会衆首領名单、咸豊二年四月二十六日『鎮庄』3、244頁。
- 138) 何秉「太平天国起義前夜の永安社会」によると、永安州には嘉慶、道光年間に湖南零陵県、湘潭県、宜章県から移民が入植した。また羅三鳳反乱軍には湖南朱洪英（昇平天国）反乱の首領である胡有禄兄弟が加わっていた（菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』332頁）。
- 139) 駱秉章奏、咸豊元年二月十五日『宮中檔咸豊朝奏摺』1、287頁。同奏、咸豊二年正月二十六日、同書4、364頁。
- 140) 菊池秀明「広西における上帝会の発展と金田団營」。
- 141) 洪大全供詞。
- 142) 盤獲西逆夥黨黃非暑等訊過供詞、咸豊二年七月十九日、F.O. 931 1375号には、太平軍の江華県城攻撃に加わった天地会軍に「朱姓」の天徳王がいたとの供述がある。なお小島晋治「初期太平天国兵士十名の供述書」を参照のこと。
- 143) 李進富供詞。
- 144) 洪大全供詞および洪大全上咸豊帝表文。また洪大全は太平天国が閏月を持たない天曆を採用したことを批判し、「曆書是楊秀清造的」と述べて楊秀清に対する不満を表明している。
- 145) 洪大全供太平軍首領名单、咸豊二年四月二十六日『鎮庄』3、244頁。洪大全は曾玉琇の他にも曾四なる人物を挙げている。なお賽尚阿は1852年1月に「左一軍帥曾」と記された大黃旗を手にした太平軍將校を殺害したと述べているが（賽尚阿奏、咸豊元年十二月初六日『鎮庄』2、565頁）、これが彼らかどうかは確認できない。